

空腹と夢のタンゴ

— 『わがゲートルの手記』より —

岡澤 敏男 (旧15回生)

昨年は新聞・放送・出版など、おびただしい量の戦後五〇年モノが氾濫しましたが、その片隅で、私たち第一五回生の『わがゲートルの青春』(勤労働員学徒の手記)もひっそりと出版されました。

戦後世代には通じそうもないが、私たちはほど昭和史によく翻弄された世代は他にないでしょう。四歳で満州事変、小学四年時に日中戦争、中学二年のとき太平洋戦争が勃発したのでした。そしてこの年「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要綱」が出され、やがて母校も岩手中学校報国隊を編成し、生徒の服装

は戦闘帽にゲートル、胸札を着装、拳手の礼が強要されていきました。学業が勤労奉仕へと傾斜し、四年生になってからは「学徒戦時動員体制確立要綱」のもとに、学業よりもっぱら勤労働員の毎日でした。

昭和一九年(五年生のとき)、政府は「決戦非常措置要綱」に基づく学徒動員実施要綱を発令しました。三年生以上は通年動員の対象となり授業は完全にストップしました。そして七月一七日、私たち五年生六三名は霧雨たちこめる盛岡駅から動員先日本鑄造鶴見工場(横浜市鶴見区)に向けて出発したのです。

この鶴見工場は臨港線浅野駅の近くにあり、いずれ自動車鶴見工場と日本鋼管鶴見造船所の狭間に位置し、大正九年操業というひどく薄汚れてガランとした工場でした。林立する周りの大煙突からフル生産で吐き出される煤煙をガンガン吸って私たちの生活が始まったが、川と緑の町で育った少年達の肺臓だから、おかしくなつて盛岡へ帰る級友も少なくなかったのです。

この工場は海軍省に納入する鑄物品を生産していました。鑄物工場は土で整形された鋳型を熱風で乾燥させ、電気炉で溶解した鉄を鑄型に注ぎ、鑄鉄製品にするわけで、土と埃と煤は容赦なく作業服はおろか、顔・鼻穴・首・襟足からパンツのなかまで侵入する始末で、終業後はただちに入浴、それから夕食という日課でした。その夕食の事情は「毎日の大豆

飯、サツマイモのおかず、サツマイモの葉のみそ汁で胸やけて悩まされた」(山本儀一)が、そのうちに米粒が少なくなり「干し人参入り御飯、干し人参入り味噌汁、干し人参入りのオカズが……」(小野裕治)一カ月も連続するようになりました。

私たちは慣れない重労働で、へとへとになり宿舎に戻りました。宿舎は南部線川崎新町駅のそばにある紫雲寮で、八畳一間に六名ずつ入居していましたが、とにかくみんな空腹でした。帰寮の途中、雑炊屋に首を突っ込んだり、寮の近隣の畑でサツマイモを失敬したり、郷里から送らせた闇米を飯盒で炊いたり、

とてもいじましい毎日でした。空腹がいかにか辛かったかは『わがゲートルの青春』の大半の手記がこもこも記録しているところです。

戦局が悪化して職場内に構築された防空壕に避難する頻度が増して行くにつれ、空腹に空襲の不安が重なり、寮生活も重苦しい空気に包まれていきました。

そんな矢先、心に染み入る音楽が聞えてきました。消灯した廊下を流れる軽やかな八分の四のリズム：とかく沈みがちな心を柔らかに包み、空腹の虫もしばし聞きほれたメロディ……。この曲はいつか盛岡で聞いたことがあった。たしかタンゴのひとつだと気づき

ました。

それにしてもだれだろう。動員先までこんな危ないレコードを密かにもってきたのは、戦時下にあつて久々に聞くタンゴだったので、レコードの流れるのを毎晩心待ちするようになりました。しかし、密かなコンサートもたった三夜で中止。監督先生の厳しい制止は、空腹を眠らせてくれたあのメロディを永遠に幻と化してしまつたのです。

ところが、この妙なる夜曲について『わがゲートルの青春』は、なぜか沈黙してしまいました。今にして思えば、あの幻の曲は「夢のタンゴ」だったのかも知れません。